
たで喰うムシもすきずき

ジヘイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たで喰うムシもすきずき

【Nコード】

N9892V

【作者名】

ジヘイ

【あらすじ】

マニアン侯爵家次女 アリシア・カルタヘナ・マニアン、側室候補として、第三王子殿下の学友となりました、ついさっき。

眼福、眼福。

あ、よだれが・・・。

え、ちょ、その凶器は、何に使うおつもりですか？

目指せ、ラブコメ！

つらぬけ、王道（作者の自己満足的な）！

あきらめずに、かきあげろ（作者がヘタレですみません）！

1 プロローグ

おお~~~~~!!

来た~~~~~!!

内心で激しく喜びの雄たけびを上げている私を余所に、正式な手順が踏まれ、納まるべき所へと納まっていく。

マニアン侯爵家次女 アリシア・カルタヘナ・マニアン、側室候補として、殿下の学友となりました、ついさっき。

本当、至福の時間だったわ。

いや、殿下との初顔合わせ的な、ね。

もう、生殿下ですわよ、生殿下！

いやぁん、どうしよう、ほんと。

おかわいらしくて、ほんと、ヨダレがでそう。

おおっと危ない。

2 生は最高！

「殿下、ご機嫌麗しゅう。アリシア・カルタヘナ・マニアンと申します。以後よしなに。」

節目がちに、楚々として。

でも、だめ、やっぱりどうしてもチラチラと目が行ってしまっ！
て、あ、めちやくちゃ嫌そうな目で視線逸らされた……。
え、視線に気付かれちゃったとか！？
どうでしょう……。。

「余は疲れた。もう下がってよい。」

き、気付かれていませんわよね？

どうにか表面上は取り繕ってその場を辞した。

あてがわれた部屋で、少しだけ気をゆるめた。

ああ、心の内から言葉遣いに気をつけないといけないかしら？

でも、はあ、もう、眼福よ、眼福。

何、あの麗しさ、おかわいらしさ！

思い出すだけで、もう食が進みそ、まっ、コホン、いやだわあ、私
ったら。

柔らかそうな艶やかな黒髪、まるで天使のような美しい顔にはト
パースのような褐色の目、すべすべのお肌。
同い年の16歳だというのに、私の肩より少し高いだけの身長に華
奢なお体。

そう、殿下は10歳のお姿のまま、成長が止まっている。

何を隠そう、わが国の宝とも言つべき第三王子殿下は、呪いつき。

そして、幸運にも、私は美少年愛好家！

全くもって、ツイてる、じゃなかったですわ、ツイていますわ！
ちよっと待って、美少年をはべらして、あゝんなことやこゝんな
こととかしてないですわよ。

いえ、ねえ、適齢期なのに、こんな趣味（性癖ではない！）なのを
憂いた両親&姉弟たちの苦肉の策が今回の側室計画だったわけ、で
すの・・・。

でも、変態じゃな、くてよ！

私は、ほんと、眼福を得られるだけで幸せなんです、もの！

えと、まあ、ねえ、妄想が暴走することたまにはあるけれど、私
の頭の中を知らなければ、誰にも迷惑をかけないわけだしねえ。

それに、第三王子殿下には、確實にお世継ぎが求められているわけ
でもな、ありませんし。

側室になれたら、あんな眼福を毎日得られるという幸福な日々を送
れるだろうけれど、そこまでの野心なんかありませんしねえ。

3 状況説明？ いえいえ、自己紹介的な何かですよ。

あてがわれた部屋で、少しだけ気をゆるめた。

ああ、心の内から言葉遣いに気をつけないといけなから？
うん、無理。

でも、はあ、もう、眼福よ、眼福。

何、あの麗しさ、おかわいらしさ！

思い出すだけで、もう食が進みそ、まっ、コホン、いやだわあ、私
ったら。

柔らかそうでいて、艶やかな黒髪、まるで天使のような美しいお顔
にはトパーズのような褐色の目、すべすべのお肌。

同い年の16歳だというのに、私の肩より少し高いだけの身長に華
奢なお体。

そう、殿下は10歳のお姿のまま、成長が止まっている。

何を隠そう、わが国の宝とも言うべき第三王子殿下は、呪いつき。

そして、幸運にも、私は美少年愛好家！

全くもって、ツイてるわ！

ちよっと待って、美少年をはべらして、あゝんなことやこゝんな
こととかしてないから、ひかないで！

早い話が、適齢期なのに、こんな趣味（性癖ではない！ここ、重要
！）なのを憂いた両親&姉弟たちの苦肉の策が今回の側室計画だっ
たわけで・・・。

ほんと、眼福を得られるだけで幸せ！

えと、まあ、ねえ、妄想が暴走することたまにはあるけど、私の頭の中を知らなければ、誰にも迷惑をかけないわけだしねえ。

それに、第三王子の殿下には、確実にお世継ぎが求められているわけでもないし、っていうか、無理だし。

側室になれば、あんな眼福を毎日得られるという幸福な日々を送れるだろうけれど、そこまでの野心なんかないわあ。

絶対、お父様が心労で倒れるわ、うん。

「アリシア様、ちょっと聞いてらっしゃいますか！」

「え？ 何かしら？ エリー？」

「まあ、また、妄想してやがりましたわね、お嬢様……。」

「ええっと、エリーさん、淑女がそのような言葉を発しては

「人の苦勞も知らないで、全く何をお考えになってらっしゃるんだか！ そりゃあ、言葉も悪くなりましょうとも！」

「うっ。ご、ごめんなさい。」

「ま、良いですわ。それよりも講義では節度を持って行動なさって下さいね！」

「え、ええ！ わかって、いえ、無論そのつもりですわ。」

「でないと、旦那様へ報告させていただきますからね、い・ろ・い・

る・と。」

「ひいひいっつ。そ、そりゃあ、色々無茶頼んじやったりしてるのは申し訳ないけど、そんなに怒らなくったって。」

恐すぎですよ、エリーさん。

私と似たような容姿してたって、あなたの方が目鼻立ちの整った美人さんなんですから、断然恐いんですよ！

「はあ、もう少しご自覚いただければ、私の心労も減るのですが・・。ともかく、アリシア様がしっかりして下されば、私は何も申しません！」

「えーつと、エリーさん？そ、そろそろ、侍女モード終わりにしてかないかな？」

休戦を申し込みつつ、お茶になだれこませた。

「ふうっ、きょうも紅茶がおいしっ！」

「また、そんな古いネタを。」

「いいじゃない、これくらい。負け狼組の方が萌えるけどね！」

「あなた、あの商家に消されるわよ、こんなネタやってると。」

「てへっ。」

「まあ、いいわ。それで、明日からの予定、ちゃんと把握してるの？」

「にらまないでよ。美人さんだと迫力が、い、いえ、はい、真面目にやりまーす！」

「えーっと、明日は殿下と歴史の講義をご一緒に受ける、で、その後は、礼節を側室候補の方々と一緒にお勉強。で、殿下や姫君とたまにお茶やお食事をしつつ、適度に人間関係を作れと。」

「・・・アリシア、そこで間違っても側室になれるように頑張ると言わないのは、空気を読んでるの？いえ、面倒くさいだけよね。」

「もちろん、空気読んでるに決まってるじゃない。堅実にいかないと！小さなことからコツコツとよ！私の『老若男女の美人さんに世話を焼かれながら過ごす優雅な老後計画』の為に！」

「・・・殴るわよ。」

「たんこぶできた～～！！！！普通殴る前にいうセリフじゃないの？」

「何？次の予告って事にしてもいいのよ。」

「申し訳ございませんでした。」

上から目線で見下ろされても、美人さんなら大丈夫！

「は、いかんいかん、新たな境地に至ってしまう所だった。」

「何か言った？」

「いえいえ、何でもございませんですよ、ハイ!さあ〜って、明日の予習でもして、早く寝ようかなあ〜っと。」

4 早起きは、ふつつ得しますよね？

「はあ、早く寝過ぎて、夜明け前に目が覚めるって、どうなのよ・・・」

「健康でよろしいんじゃないですか？まあ、城内の方々が仕事を開始した直後でしょうから、流石に身動きを取れませんが。」

「ですよねえ。って、事でエリーさんや、ものは相談なんですが。」

ニツコリ、笑顔は大切ですよ。

「はあ、わかりましたよ、用意致しますのでお待ち下さい。」

「ありがとうございます！」

ギロリ。

はあ。

「む、無言の圧力が！？う、う、う、そ、その代わり、あの子のお迎えと今晚の添い寝権を！」

「っ！わ、わかりましたわ。」

ちよつと、顔と動きが違っ！

かろうじて、真面目な表情だけどさあ！

「ううつ、勝ったはずなのに、負けた気がする・・・。」

はい、右見てゝ、左見てゝゝ
だつれもいませんねえゝゝ

さあ、お庭にでも行つて見ようかなあ？

確か、あつちの方に東屋があつたような。

・・・庭も広いわ！
ちよつと、迷うつて！
か、帰れるかな？

・・・あー、やっとたどり着いた。

うん、やつぱりいい雰囲気だわ！

「すうゝゝゝつ、はあゝゝゝゝ。ああゝ、
気持ちいい朝だわゝ。」

あら？

あんな所に、赤い花？

あれは

「あなたは誰かしら？」

ビクッ！

後ろから聞こえた声に、体が強張った。

「ねえ、そのあなた。ここがどこだかわかっていて？ ゆっくりと振り向いて、所属と名を名乗りなさい。」

やっぱあゝ。

ここって、もしかして王族の方々の・・・。

ゆっくりと顔を伏せ、礼を取りながら、振り向く。

「申し訳ございませんっ！」

覚悟を決めて、面をあげた。

真っ赤。

真っ赤な、長い豊かな髪。

燃えるような輝きを放つ褐色の目、すらりとした肢体を黒いドレスで包んだ美女。

少し離れた距離さえ飛び越える迫力。

「・・・ラディエイタ」

「あなたの名、ではなさそうね。」

「あつ、も、申し訳ございません。」

「名を、名乗りなさい。」

「あ、アリシアと申します。申し訳ございませ

「家名は？と聞くのは野暮ね？アリシア、いいえ、アリスちゃん。」

「え？」

「いくら特徴が似ているといっても、見る人が見ればわかるもの。例え、多少、フツ、奇抜な服装をしていてもね。」

「バ、バレてる？」

「え、かなりのピンチ??」

「なあゝんてね。」

「は？」

「ひつかかった？いやあゝん、何て素直な子！」

「え？」

「だって、私、部外者なのよねゝ。それに、立ち入り制限なんて元からかかってないし、ここ。」

「!??・・・じゃ、じゃあ、え、でも、さつき。」

「そんなわかりやすく混乱してくれるなんて、かわいいわあゝ。」

「あ、あのお・・・ど、どちらさまで？」

「ラディエイタ」

「え、それは」

「フフッ、その花に見立ててくれるなんて、粋だね。気に入った。」

ゾクッ。

ちよつと、美女様の目が肉食獣に！

いやあゝな、予感が・・・。

「また、次に会えるのを楽しみにしてるわ。」

「え、それは、どういう

ブワアサアッ

「わっ！」

一瞬の突風に目閉じて、とっさに上げた手で顔を庇った。

再び目を開けた時には、誰もいなくなっていた。

ラディエイタの花を除いて。

5 王宮の料理うまー

はっ！

私、普通に名乗っちゃったよ！

頭悪すぎだろうよ、何やってんだよ！

とか気づいたのは、朝食の最中でした・・・。

けど、あの場合エリーに罪着せちゃう事になるんだから、まあ、間違っではなかったのか。

まで、なぜ偽名という手を思いつかない！？、と悶々としながらも、食事に集中。

うまうま。

ああ、表情だらけてるんだろうなあ、でも、まあいいやあ。

さっすが、王宮、レベル高っ！

いくらでもいけそう！

ただ、朝食にはちよっと品数多いけど・・・。

朝から、肉はどうよ。

いや、おいしくいただいたけどさ。

出されたものはきちんと食べる主義ですから！

お残しは許しまへんでえ！！

と、しつけられてるからね、お隣のエリー様親子の無言の圧力で・・・。

笑ってない笑顔って最恐だと思います。

それはおいといて。

謎の美女現る！？

ですよ、奥さん。

見出しっぽく言ってみただけ、全くわかんないわ。

うーん、誰？というか、何だったんだろう？

お供を連れてなかったということは、貴族ではない？

でも、あの気品はどう説明すれば？

王族レベルでしたよ、カリスマ性といい・・・。

いきなり現れて、いきなり消えるとか。

エリーに相談、いや、絶対怒られるから嫌だ！

うん、謎は謎のままで！！

「アリシア様、いつまで唸ってらっしゃるんですか？そろそろお支度を。」

「あ、はいはい。」

「返事は一度で結構ですよ。」

「は、はい。」

6 とりあえず、主要人物の紹介もかねてみようか

講義は、城内の一室、我が家の貴賓室のような場所で行われたわけだ。

贅沢に空間を使用して配置されたイスは、ゆったりとしたベロアのもの、特製の小さな机は手触りも細工も一級品、その右隣りには大理石の小さな机というか本とかの置き場？、逆側には繊細なガラスのグラスやら飲み物が鎮座していた。

うっわ。

うっわ。

うん、ひくくらい豪華。

殿下もご一緒ですもんね、わかります。

そして、男女比はプチハレム状態。

他ではお目にかかれない光景だわ。

ちなみに、配置としては、殿下のお席が一番先生方に近い位置、その後方に公爵家のセリーヌ様を中心として、左右に侯爵家のカトリナ様、私、その他大勢的なノリで後ろに扇状？でした。

まあ、人数少ないからそんなに説明する程のもんじゃないか。

そうそう、セリーヌ様は艶やかな黒髪をきちつと結い上げたスレンダー美人様です。知的な緑色の目が美しい、まさに淑女なお方で殿下のいとこ様でらっしゃいます。

カトリナ様は赤味かがったこげ茶色の髪をいつも華やかに結って

らっしゃるお洒落美人様です。ぼんきゅぼん、色香に惑わされそうです。

非常に美形なお二人の後光が輝かしすぎて、他の方々がかす、ゴホゴホ、いえ、私の頭が残念過ぎるので、他の方々を覚えられなかっただけです、はい。

気をとりなおして、講義は、っと。

あゝ、先生方と殿下のやり取りの下、進められるっと。

いや、ねえ、殿下の頭の良さに脱帽なんですけれど、やっぱり、女子には発言権も質問権もないわけですね、了解。

ちよーっと、この辺り気になったんですけど、ダメですよねえ。

あれ？

ああ、聡明と名高いセリーヌ様もご質問なさりたいんじゃない？

あーっと、カトリーナ様はちよっと飽きてきてらっしゃいます？

うゝん、大変。

というか、せつかくの機会なのに、何、この置物にぎやかし要員な扱い。

殿下、本当に、徹底して眼中にないんですね、私たち。

とりあえず、両親にお伺いを立ててみた。

質問したいんだけど、していい？

-ダメ。女子はでしゃばるな。

だって、せつかくの機会なのにもったいないじゃない。

じゃ、家庭教師か本おくれ。

- それもダメ。抜け駆けしようと思われたくないもん。

もんって……。じゃあ、娘がストレスで倒れてもいいの？

- なら、帰ってきなさい。

う、それはちょっと。（せつかくの眼福が。）

- 我慢なさい。

皆さんと一緒に抜け駆けじゃないよね？

- お前はまた何をやらかす気だ！

大丈夫、何とかありますわよ、お父様。オホホホホッ。

という、手紙のやりとりをしてたら、季節の変わり目になってしまった。

よく耐えたわ、私。

閑話休題 麗しの乙女とその下僕たち

マニアン侯爵家次女 アリシア・カルタヘナ・マニアン。

彼女が側室候補として住まうことになったのは王宮の一室。
豪華でいて、シンプルにまとめられた調度品。

ネコ足の優美な脚線美の長椅子には、先程到着したばかりの乙女。
宝石のような目はふんわりとカーテンが揺れる窓越しに庭園へ向け
られている。

長く豊かな金色の色彩は差し込んだ夕陽に艶を放ち、スリムで優雅
なスタイルの体へと流れる。

長旅の疲れからか、少し物憂げな雰囲気静かに場を満たしていた。

侍女たちはその光景にそつとため息を漏らす。

その空気を壊さないように。

声に出さずとも彼女らの想いはひとつだった。

ふと、侍女たちの様子に気づいたのか、そちらを向いた乙女はかわ
いらしく首をかしげ、口を開く。

「ミャーオ。」

ああ、いつ見ても何てきれいな、リビアン（さま）！

「ああ、かわいいリビアン、馬車に酔わなかった？不便はなかった？」

ゆっくりと近づき、その隣りに腰かけた、アリシアが優しくその頭をなでる。

「ミヤア。」

緑色の目を細め、アリシアの金髪よりも赤みがある柔らかな毛並みを上品にその手に押し付ける。

「リビアンさま、アリシア様も帰っていらっしやいましたし、夕餉に致しましょう。」

「ミヤア。」

「そうですね。今宵は私めがアリシア様より添い寝を仰せつかっておりますので、お休みの前にマッサージはいかがでしょうか。」

「ミヤア。」

「そういう事ですので、アリシア様、夕餉の後はお一人の時間をお楽しみくださいませ。」

「え、ちょ、エリーさん？もう少し、触れ合せ

「リビアン様は長旅でお疲れなのですよ、アリシア様。では、参りましょうか。」

「ミヤア。」

「そ、そんなあゝ。リビアン待つてゝ。マッサージなら、私がゝゝ」

閑話休題

麗しの乙女とその下僕たち（後書き）

あの子とは、マニアン侯爵家のお猫様、リビアン嬢のことでした。

7 策士？もちろん、私には無理ですから。

両親からの許可はいただいた！

つてことで、やってみたのが、お茶会。

まあ、順番にお招きしていくというのが恒例なんだけどね。

改めて顔ぶれを見ると、セリーヌ様とカトリーナ様とわが家以外、それぞれの御家の2番手、下手したら3番手のご令嬢ばかり。

まあ、第三王子ともなると、王位継承権なんてあつてないようなものだし、呪いつきで正妃も娶らない、側室（お話し相手）候補となればしょうがないか。

それは置いていて、とりあえず、公爵家と侯爵家からお伺いを立ててみましょうか。

「ようこそおいで下さいました。まだまだ拙いばかりの茶会ではございますが、お楽しみいただけましたら、光栄ですわ。」

「まあ、こちらこそ、お招きありがとうございます。本日は珍しい東方の茶葉とお聞きしましたので、菓子などお持ちしましたわ。お気に召すかしら？」

「嬉しゅうございますわ。どういった菓子かしら。とても楽しみですよわ。」

艶やかな黒髪の控えめに結い、すっと伸びた背筋に知性の煌く瞳。さすが、公爵家のご令嬢だわ。

「ふふっ、東方の茶葉にお菓子なんて洒落てますこと。体を清める

ものかしら、それとも、美しさを保つものかしら。」

「よくご存知でらっしゃいますわ。カトリーナ様のお美しさの秘訣でらっしゃるのかしら？」

「まあ、それはどうでしょう？」

「あら、とても残念ですわ。ご教授いただけるかと期待しましたのに。」

優雅に扇子で口元を隠す様でさえ色気が！！
これが噂の殿方ホイホイってやつですか！？
殿方じゃないけど、ひっかかりそうだね。

赤味がかったこげ茶色の髪はゆったりと結い上げられ、茶会でもおかしくないギリギリの範囲でハツと目を奪われるよう、華やかに結われている。

と、まあ、主要なご令嬢の描写はここまでにして。
つて、え？他のご令嬢？

もちろん、後ろで相槌打ったり反応して下さってますよ、はい。
お二人でかすん、ゴホゲホ、私の目が節穴なので割愛という事で・・。

さて、どう切り出すか。

和やかなんだか、そうでないんだかわからないお茶会って、ほんと肩が凝るから苦手なんだけど。

「そういえば、アリシア様はこちらに馴染まれまして？差し出がましいかもしれませんが、少し気になっておりましたの。」

いいパス来た~~~~！！

「ええ、戸惑うことも少なくなって参りましたわ。ですが、まだ不安に思う所もございますので。」

少し儂げな笑顔で困惑気味にと。

「あら、何かおありなの？そうなのでしたら、おっしゃってみては？ねえ、皆様？」

「そうですね。幼い頃から、こちらにいらっしゃる方々ばかりですもの。お力になれるかもしれませんわ。」

釣られてくれた~~~~！！

「私などには勿体無いお言葉ですわ。けれど、恥を忍んで打ち明けてもよろしいのでしょうか。」

「あら、そこまでおっしゃったからには、教えていただきませんか、気になって眠れなくなってしまういそうですね。寝不足はお肌の大敵ですよ。」

「そこまでおっしゃっていただけたのでしたら。ご講義についてなのですが……。あの、わたくし、ご講義の内容でわからない所がたくさん出てきてしまって……。もちろん、殿下の御為のおんためご講義ですから、内容が深く多岐に渡つてのものとは存じておりましたけれど。皆様にご迷惑をかけてしまわないかと。」

「そうね。確かにアリシア様のおっしゃる通り、講義内容はとても高度なものですわ。正直申しますと、私も多少なりとも気になる点が出て参ります。」

「では、そういった点はどうしてらっしゃるのですか？」

「こちらの蔵書をお借りしておりますわ。」

「さすがはセリーヌ様。わたくしなどでは、そのような方法では追いつきませんわ。」

「ですが、いくらこちらの蔵書がすばらしくても、専門的なものになれば心もとないですわよ。現に、美容の書物など限られておりますしね。そこから派生した各国の文化もありますのに、残念で仕方がありませんわ。」

「まあ、そうでしたの。では、どうすればよいのでしょうか。」

「それでしたら、殿下の講義へ差し支えない程度で、私たちだけで講義を開いてもよろしいのではなくて？」

「そんなことが可能ですの？」

「何も全て殿下と同じ師につく必要もございませんし。各分野でそれぞれの師を用意すればよいこと。皆様の御知り合いでいらっしゃるのでは？」

意味深な流し目。

ま、競争を促して、良い師を集めさせるおつもりでしょうか？

やはり、策士でらっしゃるわ、セリーヌ様。
お慕いしてもいいですか？

「いないこともございませんわ。ねえ、皆様？」

おお！

カトリーナ様、のっちゃいました？

勝気な所もまた、イイ！！

「では、皆様の学びたい分野を決めて、どなたと御知り合いかを申し合わせればうまくいくのではございませんか？」

「そうですわね。殿下の御名を汚さぬ為にも、力をつくしましょう。

」

「ええ。」「はい。」

はあ、仕切っていただけると、何て楽なの！
セリーヌ様、一生ついて行ってちゃってもいいですか！

8 山あり谷ありって、平坦な道はないんですか。そうですね。

ま、そんなこんなで勉強できる機会が一層増えるという、嬉しいのか悲しいのか複雑な状況に。

王家の系譜という名の歴史でしょ、世界史でしょ、世相も絡めた文化史、算術に、礼節も大幅増量って、中々の豪華ラインナップ。

えへへへ、ものすごい贅沢なはずなのに、あれ？何か目から水が？

はっ！

気がつけば、愛しのリビアンとの時間が！？

え、ちょ、エリーさん？

自習が終わるまで触れ合い禁止とか、のお~~~~！！

少しいいから、モフらせて下さいお願いします！！

リビアン、可愛いそうな子を見る目をしないで……。

もう無理、立ち直れない……。

ってことで、気分転換にエリーの侍女ルックで城内を散歩なんてしてしまったり。

ああ、そういうはこの格好で確か謎の美女ラディエイトにあっただったつけ？

もちろん、エリーには言っていないけどね。

懲りる？ナニソレオイシイノ？

はっ、あんな所にお美しい方が！

ちよっ、ちよっと、なんて眼福なの~~~~！

もっ、辛抱たまらん！！

テンションMAXな内心を侍女スマイルで押し隠し、そそっと近づく。

窓辺でまどろんでらした、黒い髪の方がずっとこちらをご覧に。

ああ、なんて美しい瞳。

「申し訳ございません。お寛ぎの所、無粋な邪魔をしてしまい、何とお詫び申し上げてよいやら。」

その場で出来うる限りの謝罪の礼をとる。

そつと目線を上げれば、ふいっと、興味無さげに視線をそらし、私など目に入らぬとばかりに身繕いをなさる。

「美しいという言葉は貴方様の為にあるのですね。ああ、その御髪に触れてみたいなどと、恐れ多いことを考えてしまいました。」

私の失礼な物言いを咎めるでもなく、身繕いを続ける高貴なるお方。

「ああ、本当に美しい。もし叶うなら、我が姫のお目通りを許していただきとうございますわ。我が金の姫も貴方様とお比べするものもおこがましいのですが、中々のものですよ。」

ふっと、顔を上げる黒髪の君。

「ご興味を持っていただけでしたか？マニアンの姫の部屋をご存知でしょうか？まあ、ご存じでいらっしゃる。流石ですわ。」

スツと音もなく立ち上がると、優雅に尾っぽを高く持ち上げ、こちらへ歩いてらっしゃるのは、まさにネコの中の王侯貴族ともいえるべき気品に満ち溢れた、おネコ様！

黒く豊かな毛足は長く、艶々と煌き、その瞳はまさに琥珀のよう。あら？どなたかに似てらっしゃる？

黒い御髪に黄色い宝石のような目。

ま、いいわ、とりあえず、おネコ様とうちのリビアンとの出会いの方が先決ですわ。

楚々として、後ろにつき従い、黒髪のおネコ様をお部屋へご案内した甲斐がありましたわ！

「お嬢様！また、何て格好を！どうして、そうメイドの格好と仕草が板について！

しかも、何で生き生きとなさってるんですか！！もうつ」

片手をエリー側の横にすつと突き出し、もう片方は口元に当てて、静かにするよう示すと、しぶしぶながら、黙ってくれた。

エリーだって、リビアンのだんな様探しに力入れてるの知ってるのよ、わたくし！

ま、あの子は誰でも魅了しちゃう小悪魔ちゃんだからしょうがないんだけどね？

緑色の宝石のような目に、赤みがかった金色の豊かな毛皮を纏っているのにスリムで優雅なスタイル、ピンとたった耳にふさふさのしっぽ。ああ、いつ見ても何てきれいな、リビアン！（親バカ）

「って、おお、黒髪の君、かなり紳士的でいらつしやる。お伺いを立ててから近づくなんて、かなり慣れてらつしやるわねえ。」
「お嬢様、何実況中継しちゃってんですか……。って、まあ!? リビアンがあんなに近くまで近づくのを許すなんて!? 何者ですの!」

「って、エリーも興味津々じゃいのよ。」

「そ、それは、お嬢様の大事なリビアンのことですから……。って、あんなに近づいて。まあ!」

「あら、毛づくろいまではじめちゃったわね。私って、愛のキューピットの才能があるのかしら?」

「お嬢様、それ、シャレになってませんよ。見る目があるのは認めますが、まず、ご自分のお相手を見つけてくださいまし!」

「ほ、ほほほ。小声なのに、どーして、そこまで迫力をつけられるのか、本当に感心しますわ。」

「お・じょう・さ・ま!」

「あ、もうお帰りになるみたいよ!」

「え、あ、扉をお開け致しますわ!」

適度に予先をそらしても、侍女モードになったエリーは気づかない。ほんと侍女として、立派過ぎるわよねえ。

でも、それが逆に考えものだわ、お父様。

「きゃっ。いえ、申し訳ございません! お怪我はございませんでしたか!」

「いえ、御気になさらずに。こちらこそ、先触れもなく参上した非礼をお詫び申し上げます。」

マニアン侯爵の御息女、アリシア様はいらっしゃいますでしょうか。

「うっわ、いきなり来客ですかい！」

秘儀、光速変身、早着替え！

「エリー、どうかしましたか。」

「アリシア様、近衛隊隊長のセルベア様がお尋ねでらっしゃいます。」

「あら、セルベア様、ご機嫌麗しゅう。どうかなさいますて？」

「アリシア様、突然の参上を御許し下さい。」

「まあ、御気になさらないで、急ぎの用件がありなのでしょう？」

「は、有難う御座います。実は、こちらにシャルル様が御邪魔して
いると御聞きしたのですが、御存知ありませんか？」

「シャルル様？」

首をかしげて問い返せば、足元から「ニャーオ」と涼しげなお声
が。

「まあ、黒髪の君。あなた様がシャルル様でらっしゃいましたか。」

「ああ、安心致しました。どこかヘフラッとお出かけになるのいつ
ものことですが、夕餉の時間まで御帰りにならないので殿下が心配
しておいででしたよ。」

「「殿下!？」」

「は、申し訳御座いません。差し出たマネを。お許し下さい!」

思わず、わたしをユニゾンしてしまったエリーは平謝り。

あっちゃ、やば。

マニアン家以外だと、普通使用人は許可がなければしゃべっちゃだめだもんねえ……。

対して、近衛隊長は侍女の非礼より、知らなかった事にびつくり顔。

「もしや、御存知なかったのですか、シャルル様の事。よく、御一緒の肖像画が描かれていたのですが。」

「申し訳ございません。私の無知を露呈してしまいましたわ。確かに思い出してみれば、殿下のご肖像で拝見しておりますわ。ただ……。肖像画と実際にお会いした時とはやはり隔たりがございますのね。」

「こちらこそ、まだいらして間もない姫君に御説明が足りず、失礼致しました。」

そういつて、お辞儀。

好意的に取れば誠実を絵に描いた感じ、深読みすれば田舎者なの忘れてましたってか?

「まあまあ、頭をお上げになったださいまし。殿下もお待ちでしょうし、お互い謝ってばかりでは堅苦しくなっていけませんわ。」

顔を上げる近衛隊長。

めんどくさいからタヌキさんでいいかしら？
だって、お人柄が読めないんですもの。

「そうですね。さ、シャルル様、行きますよ。」
「ニャー。」

「それでは、失礼致します。」
「ニャーオ。」

「御機嫌よう。」
「ミャーオ。」

あら、リビアン、あなた乗り気ですわね。

鳴き声に応えるかのように、もう一度振り返ってから、シャルル様はお帰りになった。

「ええっと、エリー。どうしよつか……。」

扉を閉めた状態のまま固まったエリーの背中に情けない声をかける。

「……私に言わないで下さい。」

「だって、殿下のおネコ様……。」

「お嬢様、知ってて連れてきてたら、本気で首絞めてる所ですよ。」

「そんなわけ、あるかぁ〜!」

「だから、始末が悪いんです。あなたの無意識ほど恐いことはないんですから。」

「うつ。・・・」ごめんなさい。」

思いっきり不可抗力なんだけど・・・。

でも、ほんとどうしょ。

だって、両想いっばいんですけど・・・。

「お父様に、リビアンのだん様候補決まったよ　って手紙書くべきかな？　はは。」

「そつこーで連れ戻されますよ、両方とも。完全に抜け駆け以外の何物でもないでしょう。殿下のお気を惹く意味で。」

「だよね・・・。あははははははは。」

かくなるうえは、もう嫁に出すしかないか！

「今、リビアンを嫁に出すってお考えになったでしょ。」

ギクッ！

「それ、賄賂作戦と一緒にすからね。」

「は、はははははは。」

「それに、リビアン命のだん様と奥様が許すとお思いですか？」

私は協力なんてしませんから、って、そっば向かれても……。わたし一人で叩き切られて来いと……？

「ひどいわ、エリー！」

「泣き真似してもなびきませんからね。」

「ちっ。」

「はあ、とりあえず、何か考えましょう。」

「そだね。」

次のお茶会が、もう少し先だったのが救いだわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9892v/>

たで喰うムシもすきずき

2011年11月17日18時02分発行